

やわらかな感性で、しなやかに学び合う子どもの育成

～「その子らしい解」を大切にした授業づくりを通して～



Since 1999

I 主題設定の理由



1 現代社会の情勢とこれまでの研究の積み重ねから

目の前の子どもたちが活躍する「令和」の時代。変化が激しく、日常の暮らしの中に人工知能などが普及する社会においては、身の回りに生じる様々な問題に自ら立ち向かい、その解決に向けて異なる多様な他者と協働して力を合わせながら、それぞれの状況に応じて最適な解決方法を探り出していく力をもった人材が求められている。また、様々な知識や情報を活用・発揮しながら自分の考えを形成したり、新しいアイデアを創造したりする力をもった人材が求められている。

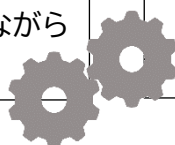
そのような中、本校では平成11年度から「やわらかな感性でしなやかに学び合う子どもの育成」を研究主題に掲げ、教育研究に取り組んできた。これは、平成14年度から完全実施となった「総合的な学習の時間」について、平成11年度より当時の文部省から研究開発校の指定を受けて研究に取り組んだ本校が、育みたい子どもの姿として掲げた研究主題であり、本校教育研究の不易となっている。

「やわらかな感性」とは

- 初めて出会う「人・もの・こと」に目を見はり、心ときめかす好奇心
- 既成の概念にとらわれず、自分の感じ方を通した気付き、発見、疑問、問題意識等
- 自分を取り巻く「人・もの・こと」について、多様な考えや価値観を受け止めながら学びを深める態度

「しなやかに学び合う」とは

- これまでの学習や経験から得た知識・技能、方法を総合的に活用して学ぶこと
- 互いのよさを認め合い、協働的に学ぶ中で、自ら考え、判断し、探究すること
- 互いの学びを関連付けることを通して、なっみたい自分を思い描き、学び続けること



やわらかな感性をもって社会の変化と対峙し、不安や困難を目の前にしても折れずにやわらかくしなう、そんなウェルビーイングを実現できる力の育成を目指していきたい。

2 本校で育みたい資質・能力から

本校では、現行学習指導要領実施に伴い、令和2年度の教育課程編成時に本校の子どもの実態、これから社会に出て必要な力、学習指導要領で求められている力の三つの視点から「本校で育みたい資質・能力」について検討した。本校における資質・能力の特色は、学習指導要領で示された「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の「三つの柱」について、本校教育目標の「知・徳・体」の視点からさらにそれぞれを分類・整理し、「9つの力」を設定したという点である。

「9つの力」を意識した授業を実践すること、学校行事等すべての教育活動において、子どもが「9つの力」を発揮し高め合う姿を見取り、価値付けることを通して、子ども一人一人に生涯を通じて学び続ける汎用的な力を育成したいと考える。

<本校で育成を目指す「9つの力」>

	〈確かな学力の向上(知)〉 共に学ぶよさを味わいながら、主体的に追究し続ける子ども	〈豊かな人間性、社会性の育成(徳)〉 自他のよさを認め、よりよい人間関係をつくることのできる子ども	〈体力の向上と健康・安全(体)〉 自他の健康や安全に関心をもち、進んで運動・行動する子ども
生きて働く「知識及び技能」の習得	・既得の知識及び技能と関連付けながら獲得した、様々な場面で活用できる知識及び技能	・様々な実践を通して獲得した、互いのよさを生かして協働するための知識及び技能	・危険から自他の身を守り、健康を保つとともに、自分の体力を高めるための知識及び技能
未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成	・自ら問いを見いだし、多面的・多角的に考えながら、友だちと共に最適解を創り上げ、表現する力	・相手の考えに共感したり自己を表出したりしながら、自己理解や他者理解を深め、よりよい人間関係を築く力	・自分の課題を設定し、その場の状況や自分を取り巻く環境や心身の状態に応じて判断し、行動する力
学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養	・「人・もの・こと」に主体的にかかわり、多様性を認めながら、共に学ぼうとする態度 ・自らの学びを振り返り、粘り強く学び続けようとする態度	・自己への気付きを深め、あこがれに向かって、自己の感情や行動を統制しながら成長しようとする態度 ・寛容な心で他者のよさに目を向け、多様性を尊重しようとする態度	・体力向上や健康保持に、主体的かつ協働的に粘り強く取り組もうとする態度 ・基本的な生活習慣や望ましい食習慣及び安全などについて、正しい判断に基づき、自己を統制しようとする態度

3 昨年度研究により見えてきたことから

昨年度(令和6年度)は、『その子らしい解』を大切にした授業づくり」を研究副主題に掲げ、「友達と関わりながら、一人一人がその子らしい解をもち、表現しようとする子どもの学び」を求めて研究を進めてきた。その中で明らかになったのは、以下の内容であった。

- 「その子らしい解」をもつ子どもの姿は、昨年度研究の核となるものであったが、「その子らしい解」の捉えにばらつきがあり、共有理解を図る必要性がある。
- 昨年度は、「9つの力」の一つの育成に焦点を当てて研究を行ったが、子どもが「その子らしい解」を創り上げる過程を検証すると、「9つの力」全体を育成していると捉えられることが分かった。
- 1年間を通して、子どもたちが継続して主体的に探究するためには、地域の学習材の教材化・吟味と、教師による年間を通した探究サイクルのさらに詳細な見通しが不可欠であることが分かった。
- 授業の事後研究会において、「教師の指導性」について話題にのぼることが多かった。教師は授業中、どの場面で、子どもの言動や表情からどんな内面を見取り、「教師の出」を瞬間判断するのかについて、さらなる研鑽が必要である。
- 9つの力のうち「知の思考力・判断力・表現力」を重点的に身に付けたいと考えて研究してきたが、子どもが思考・判断するための手立てが不十分であった。子どもが何を基にして、どのように思考・判断すればよいのかという見通しをもつことができるように、手立てを講じる必要がある。

子ども一人一人が、自分の中に起きたことを一つ一つ積み重ねながら価値や知識をつくっていく、創造的、形成的な学びが大切であることは今年度も変わらない。そこで、「その子らしい解」を捉え直し、共有した上で、今年度も『その子らしい解』を大切にした授業づくり」を実践していきたいと考える。

以上の3つの視点から、研究主題と副主題を以下のように設定した。

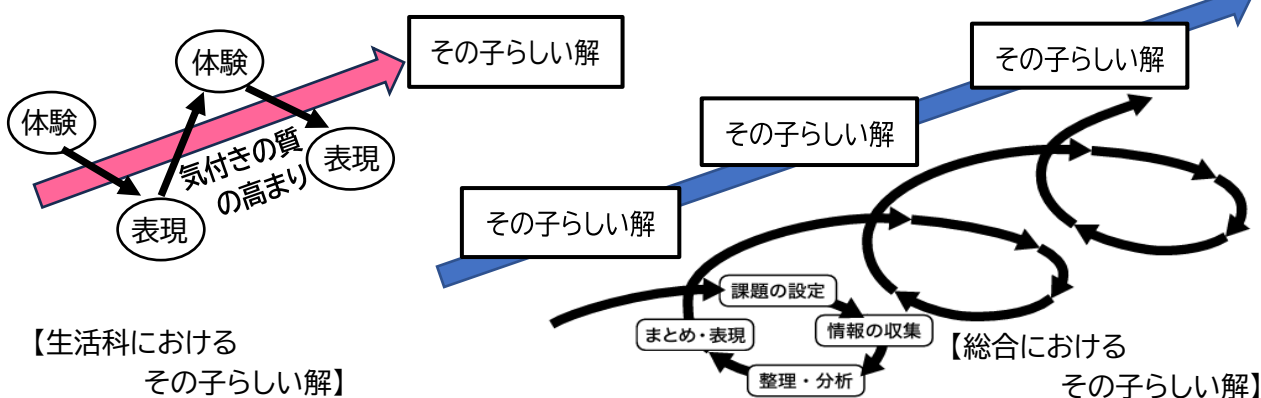
研究主題 やわらかな感性で、しなやかに学び合う子どもの育成
副主題 ～「その子らしい解」を大切にしたい授業づくりを通して～

「その子らしい解」とは

- 探究課題の解決に必要な「人・もの・こと」との関わりや、多様な他者との協働的な学びを通して創り上げた課題に対する考えや判断、新しい価値観のこと

「その子らしい解」の捉えについて

生活科においては、体験活動と表現活動との総合作用によって高まった気づきや考えのことを、総合的な学習の時間においては、学習過程の1サイクルの終末にもった子どもの考えや判断、新しい価値観のことを「その子らしい解」と呼び、更新・変容するものと捉える。



同じように探究のサイクルを辿っても、子ども全員が同じ考えに到達するものではない。探究のサイクルが進むにつれて子どもの考えは変容し、その子特有の見方・感じ方が重なり合って、一人一人違った考えが創り上げられる。わたしたちは、探究を経て創り上げられる「その子らしい解」を大切にしたい授業を展開したいと考える。

Ⅱ 研究仮説

身近な生活や地域から見いだした課題を解決するために、子ども一人一人が「その子らしい解」を創り上げる過程を大切にしたい授業において、次の1～3の視点で手立てを工夫すれば、「やわらかな感性で、しなやかに学び合う子ども」を育成することができるであろう。

《研究の3つの視点》

- 1 地域教材の開発・活用と探究サイクルのデザイン
- 2 探究を促進・深化させる教師の一手
- 3 子どもが感じ、考えたことの価値付け



Ⅲ 研究内容



本研究では、研究教科・領域を生活科と総合的な学習の時間とし、研究の3つの視点について以下の手立てを講じ、授業を実践・検証していく。

1 「地域教材の開発・活用と探究サイクルのデザイン」について

手立て① 地域素材の教材化

本校学区および周辺地域には、山(信夫山、弁天山、花見山)や川(阿武隈川、祓川、松川)などの自然、市役所や消防署、下水道浄化センターなどの行政関係施設、音楽堂や競馬場、ラジオ局などの社会的施設等、総合的な学習の素材が数多く存在する。わたしたちは、それらの地域素材を子どもの興味・関心、教師の意図、教材の特性を踏まえて、以下のような開発・活用を通して教材化したいと考えた。

ア 地域素材探しフィールドワーク

これまでの研究により、大まかな地域素材については分類・整理されているが、実際に足を運ばなければ、現状や課題、関わる人々の思いや願いを知ることはできない。そこで、令和6年度研究のまとめが終わる年度末から令和7年度はじめにかけて、職員によるフィールドワークを複数回行い、地域素材の情報を集める。得た情報は地図や分類表にまとめ、クラウド上で共有できるようにする。

イ 地域に関する情報の収集・累積

教師一人が入手できる情報には、質・量ともに限界がある。そのため、日頃から職員全員が地域における出来事、イベント、健康、防災等に関する情報のアンテナを高くし、新聞や広報紙、行政の公式 SNS 等から入手した情報を累積・共有することで、子どもに出合わせたい「人・もの・こと」について最新の情報を広い視野から集めることができるようにする。

ウ 複数の目を通した教材の検討

これまでの研究体制では、生活科部会と総合部会に分かれ、さらに学年部会の単位で教材開発、単元構想の検討が行われてきた。そのため、研究授業の際になって初めて他学年の単元構想の概要を知ることがあったり、学年2人の担任で授業を構想するため視野が狭くなってしまったりすることがあった。そこで、共同研究の良さと同僚性を生かし、地域の「人・もの・こと」がねらいに応じて適切に活用されているかどうか、全体研修の時間を十分に確保し、複数の目で検討できるようにしたいと考える。

手立て② 単元計画の構想と練り直し

本研究の要である「その子らしい解」は、探究のサイクルや単元の終末に創り上げられるものである。そのため、生活科においては、体験活動と表現活動が豊かに行き来する相互作用を大切にして単元構想すること、総合的な学習の時間においては、探究の質が高まる学習過程を意識して単元構想することが必要になる。年度初めに考えた単元構想については、探究のサイクルが1つ終わったタイミングや、学期終了時のタイミングで再検討する。ただし、単元のスタート時に子どもと一緒に作った「探究のゴール」の筋から外れないように留意する。

2 「探究を促進・深化させる教師の一手」について

手立て① 地域人材との協働的連携

本校で大切にしている地域の「人」との出会いは、その方の生き方にふれることである。地域の「○○さん」の仕事や取組に対する思いや願いにふれ、その生き方から感じ、考えたことを自分との関係で見つめ、振り返り、問い続ける子どもの姿を目指している。

そのために、わたしたちは2つのことを大切にしたいと考える。一つ目は、実践のパートナーとも言える地域の方々と本校で育てたい子どもの姿、単元の目標等を共有し、子どもに関わるスタンス(伴走者として見守っていただく、あえて壁となり課題に気付くことができる関わりをしていただくなど)をご理解いただいた上で連携を図ること。二つ目は、地域の方への連絡や依頼を自分たちで行うことができるような、子どもの社会性やコミュニケーションスキルを高めることである。

なお、手立て②の「子どもを本気にさせるゆさぶり」において、(新たな)人との出会いを設定することも考えられる。その場合も手立て①として位置付け、一単位時間の手立てとしてだけでなく、その前後の打合せや準備、授業外での関わりも含めて研究、検証していきたいと考える。

手立て② 子どもを本気にさせるゆさぶり

子どもが主体となって、探究のサイクルを回していく。それは理想的な姿であるが、そこには「教師の出」(指導性の発揮)が欠かせない。生活科や総合的な学習の時間の授業における「教師の出」は、限定的で瞬間的なことが多く、その瞬間を見きわめるには、子ども理解と本時のねらいと本時のゴールに対する深い洞察が欠かせない。いずれかが曖昧では、「出る」瞬間を逃したり、何度も出過ぎたりと、子どもの熱量を下げる結果となってしまう。

子どもの思考が停滞したり、活動において手詰まり感があつたりした時には、教師がその状況を適切に認識・分析し、必要な発問、問い返し、資料の提示、新たなもの・こととの出会いなどの手立てを講じる必要がある。また、あえて「見守る」という判断もあるかと思うが、見守る中でも問い返す視点や手を貸す場合の根拠を明らかにしておく必要がある。わたしたちは、そのような働きかけを授業における教師の「ゆさぶり」と捉え、授業における「教師の出」について、実践を通して研鑽を深めたいと考える。

3 「子どもが感じ、考えたことの価値付け」について

手立て① 子どもの内面の可視化

本校が目指す「やわらかな感性」をもち、「しなやかに学び合う」子どもを育成するためには、「やわらかな感性」を働かせている子どもの内面を見取り、「しなやかに学び合う」ことができるように、個々の子どもの内面を授業の中で可視化していくことが大切である。子どもの内面を可視化することで、子どもは自分を再認識(メタ認知)したり、互いの思いや考えを知って交流したり、教師は子どもを価値付けたりすることが可能となる。

わたしたちは、思考ツールの活用や板書の工夫、カードの累積、教室掲示、振り返り、作品づくりなどの手立てを工夫しながらも、子どもの内面を可視化した後どうするかという目的を常に考え、授業を構想・実践したいと考える。

手立て② 子どもが「自分らしい」に気付く価値付け

本研究で大切にしている「その子らしい解」をもつ子どもの姿は、子どもの立場に立てば「自分らしい解」をもつことである。大人でも、「自分らしさ」に気付くのは難しい。子どもなら、なおさらである。

わたしたちが「その子らしい」と見取っている子どもの姿は、すでにその子のもつ背景や内面を丸ごと肯定した価値付けが入っている。

「あなたの気付き・発見・疑問・考え・発想には、こんなよさがある。しかも、それはあなたの経験に基づいた感じ方・考え方で、あなただけのもの。」

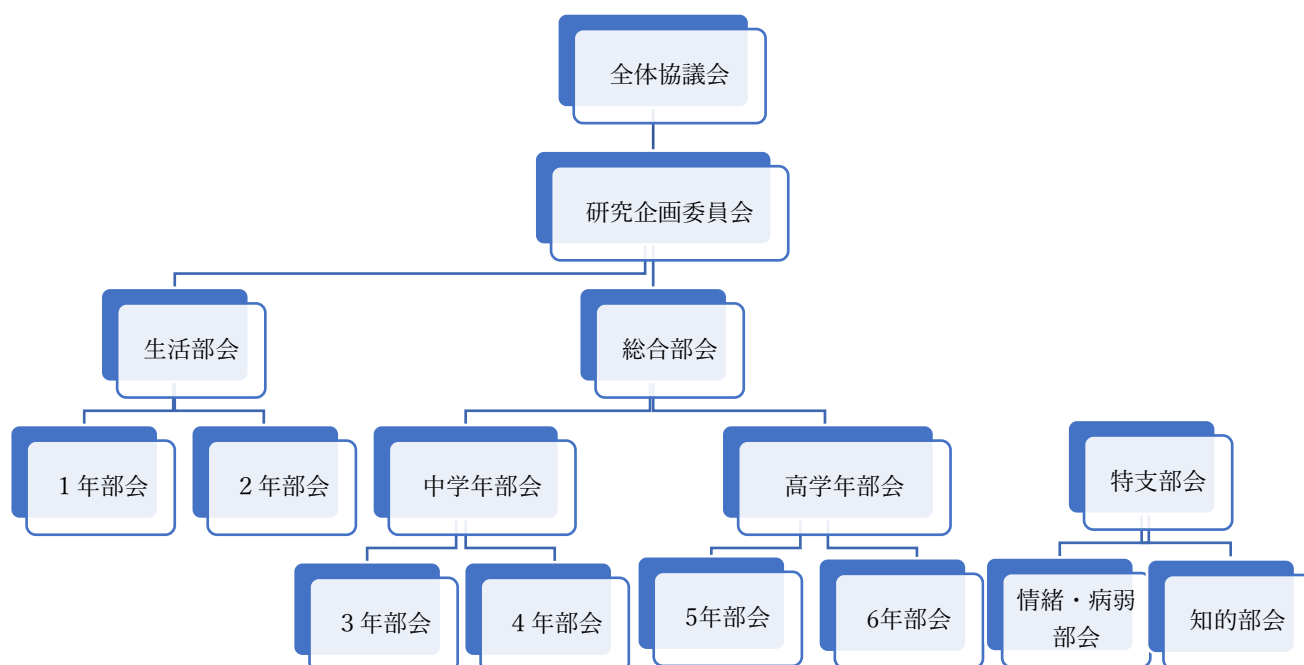
善し悪しや優劣は関係ない。その子の内面を肯定し、認め続ける。それは子どもにとって安心感やうれしさにつながり、自分の感じ考えたことを誰かに伝えたいくなるのではないか。そして、その子は自己肯定感を高めることができるのではないか。

わたしたちは、そのような温かいまなざしで子どもを見取り、価値付けることを大切にしたいと考える。

IV 研究方法及び組織



チームとしての力を大切にした共同研究を推進するため、研究企画委員会の役割を明確にする。研究企画委員会は、研修主任を含めた6名で構成し、研究全体の内容や方法の検討をしたり、全体の調整や取りまとめをしたりする。授業実践で見取った子どもの姿を通して、授業者から出された課題意識などを生かしながら、日々の授業改善に資する提案や研究の企画ができるようにする。なお、研究企画委員会は、状況に応じて校長、教頭、教務主任も参加する。



子どもの発達段階に応じた学びとなるように、生活科(低学年)・中学年・高学年・特別支援のブロックに分かれ、各ブロックを中心とした研究を進める。ただし、「9つの力」は発達段階に関わらず本校でめざすべき資質・能力であるため、ブロックを超えた学校全体の共同研究を基本とする。そのため、現職教育全体会で、研究の意義、ねらいなどを全体で共有できるように、計画的に研修を進めていく。